

# Nancy はモンスターか？

サザン・ゴシックとして読む *Requiem for a Nun*

藤野 功一

## 序

「サザン・ゴシック」という用語は、1935年にエレン・グラスゴーの『サタデー・レビュー』の巻頭エッセー「ヒーローとモンスター」で初めて使われた。このエッセーの中でグラスゴーは、ウィリアム・フォークナーを「サザン・ゴシック」を代表する作家の一人として言及しているが、その時に念頭にあった作品は、彼女のエッセーからさかのぼること4年前の1931年にフォークナーが出版した作品 *Sanctuary* だろう。そしてグラスゴーのエッセーから16年後、*Sanctuary* の後日談として、*Requiem for a Nun* が1951年に出版され、*Sanctuary* で扱われた事件が1929年に起こってから数年後、1930年代に起こった嬰兒殺しとその後日談が戯曲小説として描かれる。

この *Requiem for a Nun* は、前作 *Sanctuary* でも見られた、悪人を同情すべき存在として描くサザン・ゴシック的価値観を保ちながら、どのように過去を新しく検討し直しているのだろうか。さらに、その検討は現代読者にどのような意味を持つだろうか。これらの問いについて、ジョルジョ・アガンベン『ホモ・サケル：主権権力と剥き出しの生』を参考にしつつ考察する。

## 1. 同情すべき極悪人

*Requiem for a Nun* の最後の場面、絞首刑が確定したナンシーを再び牢屋へと送り返すとき、看守はナンシーに声をかけて「悪く思わないでくれよ、ナンシー。おまえさんはここヨクナパトーフアの歴代の犯罪の中でも一番極悪なことをしちゃったんだからな」(662)と言う。ナンシーに同情的な看守の台詞が示す価値観には、グラスゴーが「ヒーローとモンスター」で論じたサザン・ゴシックの特徴がよく示されているだろう。「サザン・ゴシック」のロマンティックな価値観においては、現代のモンスターは過去のヒーローとかすみ一つで隔たった存在である。その価値観の中では、例えば『サンクチュアリ』におけるポパイのような典型的な悪人でさえも、読者の共感を呼ぶ存在として捉えられる。『サンクチュアリ』の続編である *Requiem for a Nun* においても、ナンシーは赤ん坊殺しの極悪人であると同時に、周囲の人々、また、読者にとって、同情すべき存在として描かれている。

しかし、サザン・ゴシック的価値観という前提があるとはいえ、赤ん坊殺しという到底受け入れられない犯罪を犯しながら、ナンシーを共感できる存在として描き出すことで、フォークナーはどのような認識を私たちに提示しようとしているのか。この疑問に答えるために、ここでは、アガンベンによる「生政治」の概念とそれによる歴史観を参考に、その観点から見るとナンシーの言動がどのように評価できるかを考えてみよう。

## 2. 「生政治」の帰結としての全体主義

1995年、アガンベンは『ホモ・サケル』において、フーコーの「生政治」の概念を発展させ、古代ギリシアのポリスにおける民主主義による統治とは違い、我々の生きている近現代社会における資本主義的民主主義は、社会的成員の動物的な生の管理体制を徐々に強めると同時に特定の人々をその体制から排除する、全体主義的傾向を帯びてきていることを指摘した。アガンベンによれば、古代ギリシアでは、ゾーエー（動物的な剥き出しの生）は各個人の私的な生活の中での管理に留まり、ビオス（公の文化的政治的活動などを行う社会的な生）と厳密に区別されていた。その時代と比べると、近現代社会は、アガンベンがフーコーを引用しながら論じたように、「洗練を極めた政治技術によって、人間を動物として管理する技術が高まり」(3)、人間の動物的な生を社会的に管理し、特定の人々から社会的庇護を剥奪し「剥き出しの生」(9)にして排除する「生政治」の体制が強化されてきた。こう指摘して、アガンベンは、近現代の資本主義的民主主義に基づいた国家の「秘められた基盤」(166)にあるのは人間の動物的な生の管理と排除の技術なのであり、その生政治に含まれる科学、医療、経済等の諸技術が目指しているのは現在も変わらずナチスの強制収容所に象徴されるような全体主義的体制だと主張する。私達は、市民権や、自由意志、社会契約などが近代国家統治の要諦だと考えていたが、そうではない。むしろ統治権の観点から考えれば、剥き出しの生とその追放こそが「真に政治的」(106)な要諦になりうる。かつてドイツにおいてヒトラーがユダヤ人の管理と排斥を標榜することでその統治権を掌握したのと同じように、現在でもアメリカにおいて不法移民の管理と排斥を訴えたトランプは再選した。やはり「剥き出しの生」を指し示して管理し、それを社会的に追放することは、主権権力の掌握に効果的なのだ。

このように考えると、ナンシーもまた、一見すると生きる権利さえ奪われた存在でありながら、テンプルの赤ん坊を殺し、さらに自分の剥き出しの生が絞首刑によって社会から追放される様を効果的に晒して、彼女の生きている南部社会が、現在まで続く生の管理と排斥の原理に従ったものであることは変わらないことを暴き出す

「真に政治的」な存在と言えるのではないか。

### 3. 「真に政治的」なナンシー

*Requiem for a Nun* の戯曲部分でナンシーが暴いているのは、社会的に抵抗する術を奪われた剥き出しの生を暴力的に管理し排除する行為にテンプルがどうしようもなく惹かれているという事実である。かつて *Sanctuary* において、テンプルはポパイやレッドが示したような暴力的関係に惹かれていた。彼女はポパイによってとうもろこしの穂軸で陵辱され、また、レッドとの肉体関係を強要されるが、テンプルは自分の生を蹂躪する彼らに自分から従い、ポパイを父親のように慕い、レッドに対して恋愛感情さえ持つ。テンプルは、このような行為を行った「過去の自分は死んだ」(535)と信じていたが、弁護士のスティーヴンスがそれに対して「過去は死なない、それは過去でさえない」(535)というように、実際にはそうではなかった。テンプルがレッドの弟に惹かれ、家族を捨てて出奔したいと思う欲望は、テンプルが依然として弱いものを蹂躪するギャングのような男性に惹かれる女性であることを暗示し、また、自分の管理下にある赤ん坊という剥き出しの生に対する生殺与奪の権利を濫用して、自分が出奔する際に赤ん坊の命を犠牲にしても構わないと考えていることを示している。その欲望を表に出さずに平穏な家庭を当面のところ維持しているテンプルは、ただ赤ん坊を切り捨てるという生殺与奪の権利を行使することを先延ばしにしているに過ぎない。そのことを理解したナンシーは、その結論を先取りしてはっきりと示す。彼女は赤ん坊を殺し、ヨクナパトーフアという南部の片田舎の共同体においても、誰にも守られることのない生に対する暴力の衝動とその行使がいかに効果的にその社会の構成員の行動に影響を与えるかを暴く。ナンシーはその行為により社会から排斥され絞首刑となるが、むしろその暴露ゆえに共感されるべき悪人ともなる。

この戯曲小説でナンシーが語る言葉はあたかもアガンベンの認識を先取りし、さらにその先をゆくようである。彼女は自分のような存在はラバのように昼の間はくびきに繋がれて働かされているが、同時に、飼い主の目を逃れ、夜になると自由に動物的な生を楽しむことができると述べる。なぜならどんなに注意深い飼い主であっても、あまりに数が多いばあいは、自分の死角にあるラバには気がつかないだろうから。ナンシーは自分の生きている社会が目指しているのは、より全員に行き渡った全体主義的な制度と動物的な生の管理であることを自覚し、その状況をラバとその管理の比喻で語ることによって、かえってその全体主義的管理制度の盲点をつくことができる存在が出てくると語る。あたかもナンシーの口ぶりでは、全体主義的な管理体制が進んでも、その犠牲となるラバや自分などの動物的な生は必ずやその管理によって捉えられない側面を見出し、状況の主導権を奪い取る機会を持ち、生の快樂を楽しむことができると言っているかのようだ。たとえ絞首刑を待って死んだように生きている状況の中でも、その体制の盲点について主導権を握ることができると信じる彼女は、自分に同情してくれる看守に導かれて牢獄へと帰りながら、「信じなさい」(663)とテンプルに声をかけることさえできる。ナンシーは、血も涙もないモンスターでありながら、同時に「真に政治的」な存在でもあるのだ。

### 結論

一見すると血も涙もない、ナンシーの赤ん坊殺しという残忍な事件を扱うこの作品は、同時にテンプルがその内面の欲望において赤ん坊を見殺しにしても構わない、暴力的な全体主義へ惹かれる心情を保っていることを暗示する。歴史的な視野に立てば、ファシズムが台頭していた1930年代に起こったナンシーの赤ん坊殺しの事件を第二次世界大戦後の1951年に作品化することで、フォークナーは、アメリカの戦後の世界においても、その社会の基盤は依然として、過去に葬ったはずの暴力的な全体主義的管理を目指して進んでいることを示唆している。

*Requiem for a Nun* のナンシーの言動は、その秘められた社会の基盤を暴いているとともに、その全体主義的な方向性へ突き進まざるを得ない社会に生きる私たちに、その方向性の帰結を自覚することでかえって別の選択肢を見出すことができる希望を示す。ナンシーに言わせれば、たくさんのラバを管理している主人がどんなに注意深かろうと、彼の目の行き届かないところにラバがもう一匹、きつというはずであるから。嬰兒殺しのナンシーは極悪人だが、同時に彼女は、一見すると自由で平等な民主主義国家に暮らす若い白人家族の基盤をなしているのが全体主義的欲望であることを暴いたが故に絞首刑に処される、そんな「剥き出しの生」を生きる存在である。その意味でナンシーはヒーローとかすみ一つでへだたったモンスターであり、それを描き出す *Requiem for a Nun* は、その忌わしい過去が死なない状況のなか、サザン・ゴシックとしての価値を保つ文学作品だろう。

### Works Cited

Agamben, Giorgio. *Homo Sacer: Sovereign Power and Bare Life*. Translated by Daniel Heller-Roazen, Stanford UP, 1995.

Faulkner, William. *Requiem for a Nun*. 1951. *William Faulkner: Novels 1942-1954*. The Library of America, 1994, pp. 283-470.

\*本研究は JSPS 科研費 JP25K03915 の助成を受けたものです。